

アイワードにXL106国内一号機

ハイデルベルグ・ジャパン

AI搭載、スマートファクトリー化進展

ハイデルベルグ・ジャパン(水野秀也社長)は4月18日、(株)アイワード(札幌市中央区/奥山敏康社長)の石狩工場(石狩市)で記者発表会を開き、昨年12月に同社に納入した国内一号機となる最新鋭菊全守延び判8色両面兼用機「スピードマスターXL106-8-18K」の稼動状況などを説明した。記者会見にはアイワードの木野口功会長、奥山敏康社長、ハイデルベルグ・ジャパンの水野秀也社長が出席。スマートファクトリー構築に向けた取り組みを語った。



AIを搭載したスピードマスターXL106の前でアイワードの木野口功会長(中央)、奥山敏康社長(右)、ハイデルベルグ・ジャパンの水野秀也社長

アイワードは1966年に設立。専門書を中心としたブック印刷を核に事業を拡大してきた。昨年10月に迎える50周年に向けて、稼動19年目になる石狩工場の刷新に着手。「100年に向けて基礎を作る」(木野口会長)という方針のもと、経済産業省の「エネルギー使用合理化等事業者支援補助金」制度を利用して約8億2000万円のうち補助額3億5000万円を投じて石狩工場スマートファクトリー化に取組み始めた。

アイワードでは同制度に基づき、エネルギー使用の削減と合理化を進め、工場内のLED照明化、冷暖房・空調の刷新、コンプレッサの入れ替えなどを実施。加えて、目標とする電力の前年度比20%削減のため、オフセット印刷機の生産体制を見直した。稼動15年を超えた菊全判8色両面機2台、菊全判2色両面兼用機2台を廃し、昨年12月にdrupa2016で発表されたスピードマスターXL106を導入。さらなる電力削減を図った。

同社の木野口会長は「生産性を下げず、品質を上げて省電力化を図った。3月には25台分の作業量をこなす、高い生産性を発揮した。初期の目的が達成できる見通しがついた」と投資の成果を披露。また、「スマートファクトリーとは賢い工場。しかし、人間がかしこくならないければ目的は達成できない。そのため働き方の改善も検討している」と述べ、繁忙期の今年3月には超勤時間が大幅に削減したことを報告した。

最新鋭のスピードマスターXL106はハイデルベルグが昨年のdrupa2016で発表した「Simply Smart」を具現化するもので、オフセット印刷の完全自動運転を実現する「Push to Stop」のコンセプトに基づき設計。プリネットと接続し、AI(人工知能)を搭載した「インテリスタ1ト2」がジョブチケットを受け取り、最適なジョブチェンジプログラムを自動的に生成して、オペレータが停止指示をしない限り自動的に印刷を続ける。また、印刷中に機械を停止することなく、色や見当の合わせを測定して自動的に調整し、オペレータが介入する作業を大きく削減する。

「AIワードの奥山敏康社長は、「機械がAIを持ち、自ら生産性を高めていく機能を持っている。版の交換はこれまでの16分から2分30秒に短縮した。立ち上がりも早く、最高速1万8000回転にまで素早く上がる」と生産性の向上を強調。ハイデルベルグはdrupaでSimply Smartを打ち出した。印刷工場のスマートファクトリー化を実現し、マスクマイズで予測された需要に基づく生産システムを構築するもので、自動的に入ってきたデータをAIが処理して全ての生産フローに自動的に流す」とオペレータがブレーキを掛けない限り稼動を止めない「Push to Stop」の理念を説明した。さらに印刷機をモニタリングし、装置が故障する前に対処する予測メンテナンスサービスの構想を明らかにした。

アイワード

老舗ではなく新店と思え

創立50周年で感謝の集い

(株)アイワードは昨年10月に設立50周年を迎え、4月18日、札幌グランドホテルで「設立50周年記念および石狩工場スマートファクトリー化感謝の集い」を開き、取引先、業界関係者約300名とともに慶事を祝った。

奥山社長は感謝の集いの挨拶で、招待客をはじめ、取引先関係者への感謝を述べるとともに、アイワードの歩みを紹介し、「木野口功会長が毎日、社員と再建

に、人を愛する、言葉を愛する」を表したアイワードのロゴの由来を紹介した。

感謝の集いでは北海道新聞社の広瀬兼三社長、北海道大学の青木由直名誉教授が祝辞を述べ、北海道中小企業家同友会の守和彦代表理事の乾杯の発声で祝宴に入った。祝宴の後、締め乾杯で北海道印刷工業組合の板倉清理事長が祝いの言葉を贈った。

閉会挨拶で木野口功会長は、「この50年間、その道のりは決して平坦ではななく、困難に一つ一つ克服していきやりのある日々でもあった」と振り返り、

新しい会社案内のゲラを見た時の印象として「社員の顔が今までと違う。写真からも仕事がいやらしい余裕のある工場となり、お客様に安心して頂ける状況となった」と述べた。また、今年1月に同社の褪せカラー写真の復元についてNHKで取り上げられた際に「老舗」と紹介されたことに触れ、

「私は企業再建を通じて老舗といわれる企業が何件も立ち行かなくなったことを体験しており、老舗と言われることに抵抗があった。しかし、全日本印刷工業組合連合会の機関誌に全国有数の老舗印刷会社と言われる中西印刷の中西さんが老舗ではなく新店と思えて言われていた。当社のためのメッセージと想い、何度も読ませて頂いた。奥山社長、幹部社員の皆さんには自分が新会社の創業者と思っ

たい」との手応えを語った。ハイデルベルグ・ジャパンの水野秀也社長はコンビ二エンスストアの全商品のICタグ採用の報道を受け、「1冊の本がいつでも流通したのかビッグデータ化され、今後、印刷も見込み生産から予測生産に変わっていくだろう。ビッグデータを処理し、従来よりも細かく短い製品を作っていくことになり、人の手では処理することが不可能になる。ハイデルベルグはdrupaでSimply Smartを打ち出した。印刷工場のスマートファクトリー化を実現し、マスクマイズで予測された需要に基づく生産システムを構築するもので、自動的に入ってきたデータをAIが処理して全ての生産フローに自動的に流す」とオペレータがブレーキを掛けない限り稼動を止めない「Push to Stop」の理念を説明した。さらに印刷機をモニタリングし、装置が故障する前に対処する予測メンテナンスサービスの構想を明らかにした。



感謝の言葉を述べる木野口功会長



挨拶する奥山敏康社長

閉会挨拶で木野口功会長は、「この50年間、その道のりは決して平坦ではななく、困難に一つ一つ克服していきやりのある日々でもあった」と振り返り、

新しい会社案内のゲラを見た時の印象として「社員の顔が今までと違う。写真からも仕事がいやらしい余裕のある工場となり、お客様に安心して頂ける状況となった」と述べた。また、今年1月に同社の褪せカラー写真の復元についてNHKで取り上げられた際に「老舗」と紹介されたことに触れ、

「私は企業再建を通じて老舗といわれる企業が何件も立ち行かなくなったことを体験しており、老舗と言われることに抵抗があった。しかし、全日本印刷工業組合連合会の機関誌に全国有数の老舗印刷会社と言われる中西印刷の中西さんが老舗ではなく新店と思えて言われていた。当社のためのメッセージと想い、何度も読ませて頂いた。奥山社長、幹部社員の皆さんには自分が新会社の創業者と思っ

たい」との手応えを語った。ハイデルベルグ・ジャパンの水野秀也社長はコンビ二エンスストアの全商品のICタグ採用の報道を受け、「1冊の本がいつでも流通したのかビッグデータ化され、今後、印刷も見込み生産から予測生産に変わっていくだろう。ビッグデータを処理し、従来よりも細かく短い製品を作っていくことになり、人の手では処理することが不可能になる。ハイデルベルグはdrupaでSimply Smartを打ち出した。印刷工場のスマートファクトリー化を実現し、マスクマイズで予測された需要に基づく生産システムを構築するもので、自動的に入ってきたデータをAIが処理して全ての生産フローに自動的に流す」とオペレータがブレーキを掛けない限り稼動を止めない「Push to Stop」の理念を説明した。さらに印刷機をモニタリングし、装置が故障する前に対処する予測メンテナンスサービスの構想を明らかにした。

「8P」が稼動する石狩工場の見学会を開催。約300名に前年比20%以上の使用エネルギーを削減するスマートファクトリーを披露した。